

一 橋 大 学 哲 学 会 報

一 橋 大 学 哲 学 ・ 社 会 思 想 学 会 会 報 N o . 2 7
(「研究会便り」より通算第55号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会

発行所 一橋大学哲学・社会思想学会事務局 tel./fax 042-580-8644

〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内

Email: phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp

URL : http://www.soc.hit-u.ac.jp/~soc_thought/conference.htm

第 22 回一橋大学哲学・社会思想学会

【日 時】 2017年12月2日(土) 10:00 開場

【場 所】 職員集会所 大広間(西キャンパス) ※いつもと場所が異なります。

【個人研究発表】

(午前の部)

10:30~12:00 上野 大樹(本学非常勤講師) 司会 小谷 英生

「文明社会としての君主制国家—人文主義的君主論の系譜と
ヒューム政治思想」

(午後の部)

13:00~14:00 石橋 諭(本学社会学研究科) 司会 久保 哲司

「フリードリヒ・ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽』
における芸術と認識の一致」

【シンポジウム】

14:10~17:40 Reconsidering the value discussion in German philosophy and sociology

Professor Dr. Eugene Kelly (New York Institute of Technology)

Phronesis and Material Ethics of Value

Dr. Jan Strassheim (Keio University)

Alfred Schutz and the values of the "well-informed citizen"

Riku Yokoyama (Hitotsubashi University)

Introduction

使用言語・・・英語(ただし、翻訳を配布、質疑応答の際は日本語も可、通訳あり)

18:00~20:00 研 究 懇 話 会 場所:職員集会所 食堂 参加費:未定

出席を希望される方は、事前に事務局までご連絡ください。

(事務局連絡先 phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp)

目次

第22回大会案内	1
個人研究発表要旨	
上野大樹	2
石橋諭	3
シンポジウム要旨	
趣旨説明	4
Eugene・Kelly	5
Jan・Strassheim	6
個人研究発表の募集	7

文明社会としての君主制国家——人文主義的君主論の系譜とヒューム政治思想

上野 大樹(社会学研究科 非常勤講師)

18世紀啓蒙のひろがりのなかにあつて、フランスの「ラディカルな啓蒙」(ジョナサン・イブズエル)とは対照的にしばしば保守的啓蒙として特徴づけられるスコットランド啓蒙の「立法者の科学」は、共和主義としての公民的人文主義(civic humanism)以上に、君主に仕える顧問官たちを中心に展開された宮廷人文主義の流れのなか位置づけることでよりよく理解できるという可能性を提示することが、本報告の大きな狙いである。こうした見取り図のなかで、本報告がとりわけ詳しく検討するのは、『道徳・政治論集』と『政治論集』で本格的に提出されたデイヴィッド・ヒュームの「文明化された君主政」という政治概念である。この概念を活用した歴史叙述が展開された『イングランド史』は、簡単に言及するものの、ここでは本格的な検討の対象とはしない。

わが国では木村俊道に代表される比較的近年の研究動向として、古典古代にかかわる人文主義的諸文献(歴史書や修辞学書)から多くを学びつつ、そうした政治思想が共和主義的主張を導かず、むしろ君主政体の新たな正当化やその統治の運営の合理化や体制内変革のための論拠を提供することもあったという点を重視する研究が散見されるようになっている。ポーコックらが、古代ギリシア・ローマに何らかの範を求める人文主義的政治思想をもつばら共和国の理念と結びつけて「シヴィックな人文主義」として理解したのにたいし、この動向は君主国の宮廷において顧問官たちを中心に受容され再解釈された人文主義の系譜を弁別し、その展開を検討しようとするものである。留意すべきは、こうした宮廷人文主義の研究は、君主政と共和政という基本的区別を前提にしているという点である。そのうえで、古典的な人文主義の近世ヨーロッパにおける影響は、共和主義思想に限定されるものではなく、じっさいには君主主義・王党主義の政治思想にもおよんでいたと考えるのである。本報告は、こうした宮廷人文主義の政治思想・統治論にかんする研究の動向に悼さしつつ、スコットランド啓蒙の道徳哲学を理解するうえでは、シヴィックな人文主義以上に宮廷人文主義からの連続性に注目することが有益ではないかという見通しを提出する。とりわけヒュームの政体論は、古典的共和主義にたいする内在批判として提示されている点で、こうした理解の妥当性をしめすうえでの重要な素材となる。王権神授説などの絶対主義的理論と異なって、古典古代の歴史を重要な言説資源として参照しながらも、古代共和政のある種野蛮な性格と近代君主政の穏和で文明的な特質を示唆する点に、人文主義的な君主論の弁別の特徴を認めることができるからである。最後に、以上の議論を通じて、ヒューム政治思想の中心を非古典的な再構成された共和主義とみる近年の見解

フリードリヒ・ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽』における芸術と認識の一致

石橋 諭 (社会学研究科 修士課程)

本発表は、1873年のフリードリヒ・ニーチェの出版されなかった未完の小著『道徳外の意味における真理と虚偽』（以下『道徳外』とする）の芸術と認識の関係性を、その言語論、真理観を考察することで明らかにする。

通例として3つの時期に分けられるニーチェ思想の中で、『道徳外』は初期思想に含まれる。『道徳外』では、初期思想ですでに真偽に関して後期と類似した思想が現れるため、初期の特異な著作として度々言及されてきた。1970年代フランスの研究から一般に広まった初期のバーゼル時代のレトリック講義や言語論への関心においては、『道徳外』は全著作で唯一のまとまった言語論として再度注目され、中期、後期思想を含むより広範な比較や、処女作『悲劇の誕生』との比較を中心に初期思想の中で位置づける考察が生じた。しかし、特に初期作品の中での『道徳外』の位置づけは、主に『道徳外』以前の『悲劇の誕生』やそれ以前の音楽と言葉に関する断片や講義との比較が中心であり、同じ初期思想にあり『道徳外』とほぼ同時期かその後の『反時代的考察』との関係は考察の中心とならなかった。

このような研究の流れの中で、本発表では、『道徳外』の内在的読解を通じて、言語論とそれと密接に関わる真偽観を整理し、その矛盾を明らかにしたうえで、『道徳外』が矛盾を自覚した上で芸術と認識の一致という遊戯の方向を持っていることを示す。これにより、顧みられることの少ない『道徳外』以後の『反時代的考察』との関係を位置付け、『道徳外』を初期思想においてより適切に理解するための準備とする。

具体的な考察方法として、まず『道徳外』の真理観を言語論との関係から示す。『道徳外』で真理は二つの意味で用いられていた。一つ目の真理は、言表が物自体と対応するという意味であったが、この言表を構成する語は、神経刺激→像→語の二度の全く違う領域への転移により生じるという主張により、この真理は不可知、推論不可能であり追及の価値のないものとされた。二つ目の真理は、言表の現実的なものとの対応関係が、言語の立法とその慣習化によりその起源を忘却して固定化、自明化したものを意味したが、ニーチェはこれに対しても否定的だった。そのため、ここで意味する真理観を『道徳外』という著作の主張そのものにも適応すると、もしニーチェが自身の主張を真として伝達しようとしていたのなら、それは真とせず自己言及的な矛盾に陥ることが指摘されてきた。

本発表では、このような『道徳外』の真に関する主張の矛盾は、1 『道徳外』の言語論と同時代の遺稿集の文体への言及からして、ニーチェによって自覚されており、さらに2 矛盾を自覚しながら言葉によって主張することが、『道徳外』において芸術と認識がともに働く遊戯として肯定的に評価されていることを示すことで、『道徳外』が認識と芸術の一致への方向を持つことを示す。

シンポジウム「価値論争再考」
Reconsidering the value discussion in German philosophy and sociology

シンポジウムの趣旨説明

19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツを中心に展開された「価値論争」は、生の哲学、新カント学派、現象学を巻き込んだ哲学史上の大論争であっただけでなく、ウェーバーの「価値自由」概念に代表されるように社会学にも影響を及ぼした。しかし1930年代に新カント派が急速に衰退し、現象学がハイデガーによって存在論へと転回すると、(マルクス主義を別として)価値をめぐる哲学的議論も自然に終息してしまった。しかし近年、独・英米圏では「ハイデガー以前」の哲学者たち、すなわち新カント学派や初期現象学派、さらには現象学的社会学者(シュッツ・グルヴィッチ)の再評価がはじまっている。こうした近年の動向を踏まえて、本企画では、ニューヨーク工科大学ケリー教授にエトムント・フッサール、マックス・シェーラー、ニコライ・ハルトマンの現象学的価値論のアクチュアリティについて、また慶応大学シュトラスハイム講師にはシュッツの現象学的社会学における価値の問題について論じてもらう。(講演は英語ですが、翻訳原稿を配布いたします。また質疑応答には簡単な通訳もつきます)。

提題者紹介

Professor Dr. Eugene Kelly

講演題目：「実践知と実質的価値倫理学」

ニューヨーク大学にて博士号取得。ニューヨーク工科大学教授。American Philosophical Association's Newsletter on Teaching編集委員。国際シェーラー学会理事。近著にMaterial Ethics of Value: Max Scheler and Nicolai Hartmann (Phaenomenologica 203, Springer, 2011)。“Max Scheler”(in: The Routledge Companion to Phenomenology, New York: Routledge, 2011)。またニコライ・ハルトマンの『美学』(Aesthetics, Berlin: De Gruyter, 2014)の英語翻訳も手がける。

Dr. Jan Strassheim

講演題目：「アルフレッド・シュッツと『見識ある市民がもつ』価値について」

ベルリン自由大学にて博士号取得。慶応大学非常勤講師、早稲田大学客員研究員。近著にSinn und Relevanz. Individuum, Interaktion und gemeinsame Welt als Dimensionen eines sozialen Zusammenhangs (Wiesbaden: VS Verlag 2015)、“The problem of ‘experiencing transcendence’ in symbols, everyday language and other persons.”(in: Schutzian Research 8, 2016)、また論集Relevance and Irrelevance. Theories, Factors and Challenges (Straßheim, Jan / Nasu, Hisashi (eds.) Berlin, Munich, Boston: De Gruyter 2018)を刊行予定。

企画担当：横山陸(社会学研究科博士課程在籍)

Phronesis and Material Ethics of Value.

By Eugene Kelly
New York Institute of Technology

In the ancient world, teachers of what we today call ethics were concerned not only to transmit to their students knowledge of the subject, but also to affect their souls positively with knowledge of virtue and the desire to attain it. This is rarely the case with teachers of academic philosophy today. The present paper explores the Aristotelian concept of *phronesis*, or practical wisdom, in the context of material value ethics. This ethical theory provides a powerful platform for the study of the nature and kind of values, our knowledge of them, and the implications of this knowledge for a theory of right and wrong. The paper argues that in addition to its theoretical value, material value ethics has strong implications for returning the teaching of philosophy to the cultivation of the moral impulse in young individuals with the end of making them cultivated and good citizens of their society. Three central features of material value ethics foster such moral education. They are the importance of solidarity and fellowship, the belief in the power of personal love, and the distinction between the empirical and ideal self that appears in moral self-conflict.

Alfred Schutz and the values of the “well-informed citizen”

By Jan Strassheim
Keio University

Philosopher and sociologist Alfred Schutz (1899-1959) has been criticized early on for the absence of objective values in his theory. Some philosophers attacked him for reducing values to the standards of different social groups (Eric Voegelin, Aron Gurwitsch), others for reducing values to the interests of different individuals (Bernhard Waldenfels). But can both lines of criticism be accurate? Or did Schutz just naively follow Weber’s idea of a “value-free” social science? While Schutz did not present a theory of value, I would like to argue that a Schutzian account of valuing could build precisely on the assumption that we cannot reach objective values.

According to Schutz, our knowledge and action is always highly “selective”. We can weigh a limited number of options, but the vast majority of possible alternatives never even enters our consideration. This implies that we can never be sure that we escape the bias of our individual viewpoint, or the bias of the standards we find in the social group we live in. Hence, we can never be sure to reach values which are objective (free from subjective bias) or universal (free from social bias). The same is true even of philosophical knowledge, which is produced by individual philosophers growing up in specific social groups.

However, we have a choice as to how to deal with this situation. Schutz (1946) presents this choice in the form of three types of person. (1) The “man in the street” accepts without question whichever values predominate in his social group, and he forces these values upon other people with the same indifference. (2) The “expert” knows her way only in her individual field of expertise and remains ignorant about the rest of the world. (3) If we find these two ways of living problematic, as Schutz clearly does, a third option remains. We can strive to be “well-informed citizens”. This means, first of all, acknowledging the fact that our values are always “selective” in the sense outlined above. Against this background, the “well-informed citizen” is ready to question the values she has followed so far. In order to do so, she tries to monitor her actions and to extend the knowledge which informs her decisions. She is prepared to adjust her values if good reasons for doing so come to light in the process.

一橋大学哲学・社会思想学会

個人研究発表募集のご案内

次年度夏大会の個人研究発表を下記の通り募集します。会員の皆様の日ごろの研究成果の発表の場として奮ってご応募ください。

【募集内容】

- 1) 第23回大会（2018年6月第1土曜予定）の個人研究発表
- 2) 発表形態 90分型：発表時間45分、質疑応答時間45分
60分型：発表時間30分、質疑応答時間30分
いずれも、任意のテーマ。
- 3) 募集人数 若干名（教員による査読あり）※査読について採択基準参照のこと。
- 4) 募集期間 2018年1月9日（火）～ 1月31日（水）まで
- 5) 応募資格 本学会会員に限る（哲学・社会思想ゼミ生は会員。詳細は会則参照のこと）。

【応募方法】

発表希望者は、下記の必要事項を「学会発表申込書」としてA4用紙に記入、募集期間内に学会事務局までご提出ください（メールでの応募可）。

- 1) 氏名・フリガナ
- 2) 所属研究科・学年・所属ゼミ（課程修了者は出身ゼミと現在の所属）
- 3) 発表タイトルと発表要旨（1200字以内）
- 4) 発表形態の希望（90分型、または、60分型）
発表希望者は、90分型または60分型かのいずれかを選択してご応募ください。
ただし、当日の時間配分の都合上、調整する場合があります。
- 5) 連絡先メールアドレス（メールを使用しない場合は、住所と電話番号）

【提出先】

メール送信先 phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp（事務局メールアドレス）

郵送先 〒186-8601 国立市中2-1 一橋大学社会学部社会思想共同研究室気付け

一橋大学哲学・社会思想学会 事務局あて

【採択基準】

1. 主題が明確であること。また、背景説明によりその意義を示すこと。
2. 主題に取り組む着眼点、アプローチを明確にすること。
3. 何をどこまで議論するのかを明確に示すこと。

応募結果は2月中にお知らせします。